

「生涯教育」を考える
—教育観の転換として—

松 田 高 志

Summary

On Lifelong Education: A Change in Educational Philosophy

MATSUDA Takashi

In "Lifelong Education", each individual pursues his or her own goal at his or her own pace all through life. This education is only possible and acceptable in a peaceful, mature society. This is not for the benefit of the nation, nor for the adaptation to the society, but for the fulfillment in one's life. This education calls for a change in the existing educational philosophy.

In order to realize and promote "Education for the Fulfillment in Life", we have to reconsider the image we have about our life. We need to have a richer, fuller image of life. We used to imagine our life in a semi-circular or trapezoidal line comprising of an upward curve (growth and success in work) and a downward curve (old age and retirement). E. H. Erickson's "Life-cycle" theory and O. F. Bollnow's "Verjungung" theory, however, present a different view. There is also a saying that life is one long process of getting mature. These different views are not conflicting, but mean a richer and realer living.

I would like to propose a new study, "Lifelong Anthropology" that focuses on man's life as a whole and on "Education for the Fulfillment in Life".

序

「生涯教育」lifelong (integrated) education は、周知の通り1965年、ユネスコの成人教育推進国際委員会においてラングラン Lengrand, P.によって提唱されたが、これは、これ迄成人教育とか社会教育と言われて来たものとは異なるというだけでなく、教育一般のあり方、考え方を大きく転換させる意味を持っていたと思われる。

「生涯教育」というものが言われるようになったのは、20世紀になって諸科学、特に自然科学及び技術が飛躍的に発展し、それと共に社会的に種々の面で大きな変化が生じ、その為に教育において従来の学校教育だけでは十分に対応しきれなくなったということが大きいであろう。つまりこれ迄は、学校教育において一通りの教育が行われ、成人教育や社会教育は、その補完的役割を果たすものであったが、しかし急激に変化しつつある今の時代にあっては、我々は一生涯何らかの仕方で学習し続ける必要があり、その為に家庭、学校、社会でのそれぞれの教育が、これ迄と違った役割を持つものとして「統合」integrateされる必要が出て来たのである。人間が生涯にわたって学び続けていくには、それぞれの教育がどうあるべきかが考え直されねばならないのである。特に学校教育は、これ迄のように社会生活に必要な一通りの知識、技能の伝授ということから、一人ひとりが何らかの形で一生涯学び続けることが出来るような態度や能力を養うことに重点を移していかなければならない。

我が国においては、「生涯教育」が言われるようになった事情として、これに加えて次のようなことがある。「生涯学習」とか「生涯学習社会」ということがよく言われるのは、一つにはいわゆる学歴社会の是正ということがある。「学校信仰」ということが言われているが、「生涯学習社会」においては、学校教育は当然相対化されることになろう。又それと共に、長寿命化や余暇の増大という流れの中で、潜在的なパワーを社会に役立つように活性化するという意味もあるであろう。

ともかくこのように「生涯教育」とか「生涯学習」が現実的問題として考えられ、又実際に促進されるとすれば、教育一般のあり方、考え方が大きく変わりうる状況が生まれると言ってよいであろう。

「生涯教育」(「生涯学習」及びその指導、支援を含んだもの)は、本来的に一人ひとりが一生涯という長いプロセスの中で自発的に、マイペースで、又自分らしいスタイルで、自分独自のテーマに取り組むということであり、又それを手助けすることである。これは、一人ひとりの自由な生き方が認められ、従って価値観やライフ・スタイルの多様性が積極的に尊重される社会において初めて真実なものになるのである。

近代国家形成期のいわゆる「富国強兵」政策の下では、教育は国民としての文字通りの即戦力、つまり統制がとれるような画一的知識や技能、又規範やエートスを身につけさせることが中心である。又これとは反対に、国家の規制を少なくし、自由競争により国家・社会の発展を計る場合も、一人ひとり自由であっても、多様な価値観やライフ・スタイルがそれぞれに尊

重されるわけではなく、どうしても「競争力」のあるものが尊重され、「競争力」をつける教育が中心になるのである。

「生涯教育」は、多様な価値観やライフ・スタイルがそれぞれに積極的に尊重される社会において初めて真実なものになる。そのような社会は、真に平和な社会と言ってよいであろう。今、「生涯教育」が盛んに言われ、推進されようとしているのは、不十分であるとしてもやはり平和な社会だからである。そして「生涯教育」が広がり、より真実なものになれば、又当然平和な社会もより真実なものになる。「生涯教育」は、「平和からの教育」であり、又「平和への教育」であると言ってよいであろう。そしてこのような「生涯教育」は、本質的に国家や社会の為の教育、あるいは国家や社会への適応の為の教育ではなく、まさに一人ひとりの「生涯成就⁽¹⁾」の為の教育であると言えるであろう。無論「生涯成就」の中に、国家や社会への適応というものも含まれるが、それは、あくまで強制とか競争ではなく、主体的、創造的なものである。これは、成熟した社会、あるいは成熟しつつある社会において初めて可能な、教育本来のあり方である。

ところでこのような「生涯成就」の為の教育が、実際に真実なものとして、豊かに広く実現される為には、「生涯教育」あるいは「生涯成就」の一層積極的な、豊かなイメージがなければならないであろう。これ迄、いわゆる「生涯曲線」として一般的に考えられていたものは、発達・成長を示す上昇線と老化を表す下降線から成る半円形（もしくは台形）のようなものであったと言えよう。しかしこれでは「生涯教育」の積極的なイメージは生まれて来ないのである。

「生涯教育」、あるいは「生涯成就」が、積極的で真実なものになる為には、これ迄の常識的なイメージではなく、もっと豊かな全体像が画かれる必要がある。以下においてそのような試みをしてみたい。その際、差し当たり全体の流れの幾つかの層(相)を取り出して考えることが有効であるように思われる。ここでは、一応四つの層(相)を取り出して考えることにしたいが、この四つの層(相)は、一見すると相互に矛盾し合うような「生涯曲線」のように見えるが、しかし決して互いに対立したり、排除し合うものではない。これは、人間の生涯全体をいわば立体的に見たということであり、その豊かさと真実な姿を示すものである。

(一)

「生涯教育」が目指している、人間の生涯の姿の一つは、「永遠の青年」ということである。従って「生涯教育」あるいは「生涯成就」の一つの層(相)は、「一生青春」ということである。一生学び続けることは、一生青年のように若々しく、生き生きとして生きることである。単に長寿であるだけでなく、「不老長寿」でありたいということである。

相田みつを氏の有名な書物で、『一生感動一生青春』というのがあるが、このタイトルのように生きたいという願いが、まさに「生涯教育」の原動力になっていると言えよう。この本の巻頭で次のようなことが言われている。「人間を根底から動かすものは、むずかしい理論や理

屈ではなくて、全身（いのち）の感動であり、腹の底からの納得であると思います。理論や理屈では、人間は本気では動きません。その証拠に『理動』ということばは辞書にありません。……中略……感動は他から強制されるものでも、命令されるものでもありません。あくまでも自分自身、つまりいのちそのものから出て来るものです。だから感動にはうそがありません。感動こそ、人間が人間として生きている証（あかし）だと私は思っております。戸籍上の年齢には関係なく、毎日何かに感動し、心のときめくこと、それを、私は青春と呼んでおります。(2)】

「感動こそ、人間が人間として生きている証」であり、「心のときめくこと」が青春であると言われているが、これは「驚き」Erstaunenを何よりも大事にしたゲーテを思い起こさせるであろう。80歳過ぎまで生きたゲーテは、まさに「一生青春」であったと言ってよいと思うが、それはやはり「人間が到達しうる最高のものは、驚きである(3)」と言ったその「驚き」によるものではないだろうか。ゲーテの「驚き」は、相田氏の言う「感動」とは別のものではないであろう。

O. F. ボルノーによれば、「若返り」Verjüngungは、それなしには人間の生が決して十分には捉えられないような決定的に重要なものであると言われている(4)。つまり人間が人間である為の本質的な課題なのである。我々は、通常いろいろな生活の仕方を習慣化し、そのお陰で新しいことに挑戦したり、創造的に生きることが可能になる。しかし新しい挑戦や創造のないまま習慣化、惰性化が進むと、心身共に硬直化し、老化の傾向が生じる。しかし人間において必然的にそうなるのではなく、生活全体の惰性的傾向を中断し、そこから飛躍したり、方向転換したりすることが起こりうるのである。それは、何らかの「感動」体験によるものであったり、あるいは危機に直面し勇気を奮い起こすことによってであったりするが、ともかく硬直化した心身をほぐし、若々しさを取り戻すのである。ボルノーは、これを「若返り」と言っているが、これは人間独自のものであり、人間らしさの証しである。

ところで、「若返り」が人間の本質的課題であるということは、実は若者にとっても又、その内面的青春 Innere Jugendは常に獲得されなければならない課題であるということである。「内面的青春は、神々の贈物として人間にそのまま与えられているのではなく、何とでも先ず獲得しなければ自分のものとならないのである。」ボルノーは、これに続いて、ヘルダーの美しい言葉を引用している。「人間の魂の青春を教育によって回復させること、おお、何と素晴らしい仕事であることか！(5)】

人間は、いわば「内面的老い」によって、どの年代においても「老いる」ことのある存在であり、又それだからこそどの年代においても「内面的青春」を回復し、「若返り」が起こる存在である。但しそれは、既に述べたように「感動」によったり、「勇気」を奮い起こすことによったり、あるいはヘルダーの言うように何らかの教育がその手助けとなるのである。

(二)

「永遠の青年」あるいは「一生青春」というのは、「生涯教育」の目指す、人間の生涯の一つの層(相)であるが、言う迄もなく又別の層(相)が考えられる。その一つは、「人生の諸段階」life stagesと言われるものである。例えば、常識的なものとして子ども期、青年期、壮年期、老年期というものがある。この他、区分の仕方はいろいろあるが、ここで大事なことは、このような区分を先に述べた、上昇期、安定期、下降期というような半円形のイメージで考えないことである。もしも半円形(ないし台形)の「生涯曲線」で考えると、「一生青春」とかボルノーの言う「若返り」は、例外的なケース、あるいは偶然的なものになり、人間にとっての本質的な意味を見えなくしてしまうのである。

従って、半円形や台形のイメージで考えるのではなく、エリクソンの言うライフ・サイクルとして考えるのが適当であると思われる。人間の生涯を、まさに一生、つまり一つのまとまりを持ったものとして、ちょうど一つの円を一周するように考えるのである。ここには、上昇とか下降というイメージはなく、人生の各段階は、優劣がなく、ただそれぞれの特徴と独自の危機・課題があり、一つのステージを十分に生きることによって次のステージにスムーズに移ることが出来、そのようにして一つの人生を成就するのである。

エリクソンのライフ・サイクル論は、これに加えて、一つの世代から次の世代へと連なっている連鎖の一環という意味を持たせている⁽⁶⁾。つまり、生殖、子育て、教育というサイクルの一部と次の世代の誕生、成長というサイクルの一部が重なり合いながら連鎖を成しているのである。このように、ライフ・サイクルのイメージは、自己完結性と世代連鎖性という二つの面を持ちうる点で大変有効であるが、ここでは、差し当たり、人生の各段階に優劣がなく、又全体として一つのまとまりを持っているという意味で、ライフ・サイクルのイメージを考えてみたい。

但し、すぐに気づかれるように、人は誰も one cycle としての一生を全うするとは限らない。天災によるしろ、戦争や事故、病気等によるしろ、いつ死を迎えるかは予測しえない。現に生きている人間にとって、ライフ・サイクルは一つの可能性でしかない。有限で、常に偶然性につきまといわれている人間の生涯のイメージとして、森昭氏は「こちらの岸から向う岸へ太鼓橋を作りついでゆく最近の一工法」にヒントを得て、「人間の生涯も向う岸へ(仏教的にいえば彼岸)へ『手』を先へ先へと作りついでゆくようなもの」であり、「さきは存在せぬ未来へ作りつぐという点だけを受けとってほしい」として「生命鼓橋の作り渡しとしての生涯」というイメージを提示した⁽⁷⁾。(但しこれは、森昭氏自身の死により、詳述されることなく、未完に終わっている。)

確かに誰も、中途までの「人生弧」Lebensbogen を画きうるだけである。完結した円を画いたと言える心境で死を迎えることの出来る人は、むしろ稀であるかもしれない。その意味で、森昭氏の主張には反論する余地はない。従ってここでは、人間の生涯とは何かをやや客観的に見るという視点から、平均的寿命を前提にしたライフ・サイクルのイメージを用いることにし

たい。

ところで、ライフ・サイクルと各ライフ・ステージを生涯教育の問題として考えるならば、エリクソンの言うように、各ライフ・ステージは、それぞれ特徴と課題を持っており、その特徴にふさわしく生き、その課題を十分にやり遂げることが、真に充実した生き方であり、そのことによってのみ得られる独特の「徳」Virtue、つまり独特の「生きる力」Vital strengthを身につけ、次のステージにスムーズに移行出来る。このように各ステージをそれにふさわしく深く生きることによって、円熟し、「人生円成」に達するのである。このように生き、又このように生きることを援助するのが生涯教育のもう一つの層(相)である。

人生の諸段階の区分としては、エリクソンの八段階説をはじめ、種々の説があるが、ここでは、古典的とも言える、自然の四季になぞらえた見方を一つの例として取り上げたい。one cycleをなす四季は、ライフ・サイクルのイメージとしてふさわしいように思われるのである。「人生の四季」という言い方は、幾つかの書名にもなっているように、よく使われているが、それぞれの季節とその移り行きが人生の各ステージの比喩として大いに含蓄があると考えられているからであろう。

草木が目に見える形で成長し、みずみずしい新緑と百花繚乱によっていのちの大きいなる勢いを感じさせる春は、幼少期から青年期にかけての時期のイメージとしてまことにふさわしいであろう。よく遊び、よく学びつつ心身の栄養を一杯に吸収し、持って生まれた豊かな可能性が次々芽を出し、葉を広げ、開花していくのである。

夏は、草や木の葉が繁茂し、いのちの働きの力強さと大きさを感じさせる季節である。人生の夏である壮年期も、旺盛に自分の仕事を広げ、充実させる働き盛りの時期である。ここでは、力一杯働くことによって自分を生かし、又周りに役立つ喜びを味わうのである。

秋は、葉が紅葉すると共に実がみのり、熟す時である。人生の秋というのは、人生の黄昏というイメージを持ちやすいが、最近は実年とか熟年という言葉もあり、もっと積極的に見られるようになって来た。壮年期は、三十代、四十代であるとすれば、実年とか熟年と言われるのは、五十代、六十代と言ってよいであろう。実年、熟年期は、壮年期のように仕事を精力的にやり遂げるといふより、円熟し、持ち味を十分に出しながら仕事や生活を味わい、楽しむことが出来る年代である。

冬は、紅葉した葉が全て散った後、裸木のみが厳粛に立っているという風景が印象深い。人生の冬である老年期も、これ迄の様々な活動から退き、近づいてくる死を静かに待つあり方が考えられる。確かに、周囲に余り迷惑をかけず静かに死を迎えることは、人生の最後の大きな課題とも言えるが、しかしもう少し積極的には、老年期は、雑多な用事やつき合いから解放され、自分だけの為の多くの時間を持ち、これ迄の人生の無数の経験のエッセンスとしての知恵を基にし、近づいてくる死に直面しつつ、生死の本質を見つめることに専念しうる時である。そこから、裸木のように、余計なものが全て取り払われて、いのちそのものが純粹に現れ出るのである。

宗教家の五井昌久氏の「裸木」という詩に、「私は厳寒に立つ裸木の枝々に／いい知れぬ美

を感ずる／底深く秘められたいのちの美を感ずる／自然の心がそのまゝ、枝々にむき出しに現われている裸木／花も葉ももう過去の自然に融けて／今はいのちそのまゝ、立っている裸木…後略…⁽⁸⁾」と美しくうたわれている。

更にもう少し付け加えるならば、裸木と言っても、春に向かって既に芽を出しかけており、その静かなエネルギーは、決して弱々しいものではない。人生の冬も、同じことが言えないだろうか。死は、昔から「往生」と言われ、新しい世界への旅立ちを意味しているが、人生の冬も、新たな「季節」に向かっていのちの新しい芽を宿し、育む時期である、と。そのようないのちの最も純粋なものを輝かせて死を迎える人も少なくないであろう。

「一生青春」ということと「人生の四季」とは、確かに言葉の上では一致しない。しかし「人生の四季」をその季節にふさわしく真に深く生きるならば、内容的に決して矛盾するものではないと思われる。

(三)

「生涯教育」あるいは「生涯成就」の三つ目の層(相)として考えられるのは、最も根本的、本質的と思われるものである。それは、「人格の向上」であり、別の言葉で言えば、「真に人間になること」、あるいは「真に大人になること」である。

孔子の「吾十有五而志乎學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲不踰矩⁽⁹⁾」は、一応人生の諸段階として考えることが出来るが、内容的に言えば、やはり一生をかけて人間として向上し、成熟していく過程の古典的例であると言ってよいであろう。「この世に生まれて来たのは、自分の魂を磨く為である」とか「現世は、修行の場である」ということが古くから宗教において言われているが、しかし特に宗教として考えなくても、このような考え方は、これ迄一般的にも見られたものである。ただ、今の時代においては、「人格の向上」ということが、大きな関心にはなっていないということは確かである。

しかしそもそも「自分を磨く」ということは、誰にとっても、又どんな境遇にあっても出来ることであり、特に逆境と言われるものは、自分を磨く大きなチャンスである。そしてこのことは、必ず自分も周りの者もより深い喜びに至らせるのである。より深い喜びに向かうことが、人生の一番自然な、意義ある歩みであるとすれば、少し長い目で見なければならぬとしても、「自分を磨き、人格を向上させること」は、人生のより深い喜びへの道であり、「生涯成就」の根本的な方向であると言ってもよいのではないだろうか。

「人格の向上」とか「人間としての成熟」ということを、ここでは「真に大人になること」として考え、それはどういうことであるかを少し述べてみたい。

「大人になる」ということは、普通には身心の両面において、又社会的、経済的な面で独り立ちすることであると一応言われる。しかしもう少し深く見れば、いかに独立しているように見える人間も、他人によって、又様々なものによって、更に目には見えないものによって助けられ、生かされて生きているのである。従って「大人になる」ことは、一応独り立ちしつつ、

しかもそれが他によって助けられ生かされていることによって成り立っていることを自覚することである、とも言える。「大人になる」ことは、このように、単に独り立ちすることであるとは言えないのである。「大人になる」とはどういうことか、恐らくいろいろな考え方があると思うが、以上のことを踏まえながら、もう少し考えられることを述べてみたい。

それは、「全体の立場に立つ」ということである。もちろん「全体」と言っても、家の場合もあれば、何らかの団体や地域、国家という場合もある。更には地球とかあるいはそれ以上の立場もあろう。いずれにせよ「全体の立場に立つ」とは、全体によって自分が生かされて生きていることを自覚し、それ故に全体の為に自分が出来ること、又自分に求められていることを力一杯果たすことによって全体を生かそうとすることである。

幼少期においては、自分の周りのことより自分の関心に没頭し、そのことが成長を促進させるのである。しかし青年期には、関心が社会全体へと広がり、その為に何らかの実践をするということが起こる。その場合、どうしても全体のバランスや調和よりも、自分が正しいと思うことや理想としていることに向かって直進しがちである。それは、やはり一方的で、狭いものであるで混乱を引き起こし、行き詰まるのである。そしてその行き詰まりの体験によって自分の独りよがりな、不完全な自分に気づき、しかもそのような自分が実は助けられ、生かされていることを知って、今まで自分の思い通りにならず苛立っていた自分から、皆の為、全体の為に自分が出来ること、自分に求められていることをしようとする自分に転換し、「大人」になっていくのである。これは、必ずしも肉体的年齢に対応するものではない。むしろそういうものと直接関りはなく、「真に大人になる」という時に起こるプロセスであると言ってよいであろう。但し、その深さは、個々によって違うであろう。

先に少し述べたように、今の時代は、「人格の向上」とか「人間としての成熟」、あるいは「真に大人になること」の積極的なイメージが甚だ乏しいと言わざるをえない。「人生科」教育を提唱した和田重正氏の著書の一つに、まさに「大人になる」というタイトルの本があるが⁽¹⁰⁾、「人生科」教育とは、真に大人になるとはどういうことかを経験的に自由に語り合うものであると言ってよいであろう。これについては、別稿に少し詳しく述べたが⁽¹¹⁾、とにかく「真に大人になる」ことの真実、あるいはそれについてのいろいろな考え方やイメージがもっと豊かに示される必要がある。「生涯教育」のこの三つ目の層(相)は極めて重要であり、最後にもう一度取り上げることにしたい。

(四)

この「真に大人になる」ことと実質的に重なることが多いが、「生涯教育」ないし「生涯成就」のもう一つの層(相)として、いわゆる自己実現、つまり自分のライフ・ワークや「使命」の遂行、あるいは生き甲斐の追求ということが考えられる。ライフ・ワークというものはっきり持っている人たちの生涯は、ライフ・ワークを遂行することと「真に大人になること」が深く結びつきながら、独特の軌跡をえがくのである。

例えば画家で、青年期の作品は、暗い緊張感に満ちたものが多いが、年をとるほどに明るく大らかで輝くような作品が見られることがある。ピカソはその代表的な例であるが、日本の画家で、例えば奥村土牛氏もその一人であると言ってよいであろう。奥村土牛氏は、101歳の長寿を完うした人であるが、晩年富士山をよく描いたことで有名であり、特に死を直前にして描かれた「平成富士」は本当に輝くような神々しい富士である。奥村氏は、その『牛のあゆみ』の末尾に、次のように述べている。「私の仕事も、やっと少しわかりかけてきたかと思ったら、いつか八十路を越してしまった。かつて横山大観先生に、『天霊地氣』という書を頂いた。私は日ごろからこれを座右の銘としているが、最近は一層、この深い意味のことを思うのである。私はこれから死ぬまで、初心を忘れず、拙くとも生きた絵が描きたい。むずかしいことではあるが、それが念願であり、生きがいだと思っている。芸術に完成はあり得ない。要はどこまで大きく未完成で終わるかである。余命も少ないが、一日を大切に精進していきたい⁽¹²⁾。」

ここで特に印象深いのは、「要はどこまで大きく未完成で終わるかである。」という言葉である。土牛という名前には、地道に一步一步ゆっくり前進するという意味が感じられるが、普通そういう場合は、「大器晩成」と言われる。しかしそうではなく、「どこまで大きく未完成で終わるか」と言われる。これは、単に「未完成だが、大きな作品」という意味ではないであろう。精進すればするほど、益々美の奥行きの高さが感じられ、その発見によって未完成であることを強く、そして大きく受けとめられるということであろう。ともかく奥村土牛氏は、「真に大人になること」とライフ・ワークとしての画業が一つに結びついている好例であろう。

ライフ・ワークをはっきりと持っていると言っても、モーツァルトのように音楽と共に生まれて来たと言える場合もあれば、ペスタロッチーのように50歳を過ぎてから初めてライフ・ワークとなる教育実践を始めたという場合もある。又仕事や「使命」の性質によって、人生の早い時期にピークを迎えることもある。従ってこの「自己実現」や「使命」等の「生涯曲線」は、人により種類により一人ひとり違う軌跡をえがくのである。又当然のことであるが、これ迄述べた三つの層(相)と複雑に絡み合いながら、その人の生涯の独自性を表すのである。

(五)

「生涯教育」あるいは「生涯成就」の全体を見ようとする時、一応以上のような四つの層(相)が考えられる。これらは、言葉の上から、あるいはその「生涯曲線」の軌跡から言えば、矛盾したり、くい違ったりしているように見えるが、実際には各々の層を十分に生きることによって、その生涯は、深みや厚みのある豊かなものになると思われる。

『人生の四季に生きる』と題する本の中で、著者の日野原重明氏は、次のように述べている。「私は老いても心健やかに生きたマルチン・ブーバー(1878—1965)の言葉をいつも心に抱えています。…中略…『年をとっていることは、はじめるということの意味を忘れていなければ、すばらしいことである。』⁽¹³⁾」

新しく人生を始めるということは、その人の「若さ」であると言ってもよいであろう。先に

述べたボルノーにおいても、「若返り」は、単に「若さの繰返し」や「人生のやり直し」というだけでなく、「新しい始まり」を意味している⁽¹⁴⁾。そして「新しく始めること」は、又ブーバーの意味で言えば、素晴らしい老年でもある。単に若さが戻るということではなく、豊かな経験や知恵を備えた「始まり」だからである。ここから言えることは、「一生青春」とか「若返り」ということと「年をとる」ということが、どちらのよさも生かしながら結びつく生き方があるということである。

このような意味で、先に引用したゲーテの「人間が到達しうる最高のものは、驚きである。」という言葉や、奥村土牛氏の「どこまで大きく未完成で終わるか」という言葉は、興味深いものである。「驚き」は、何かを知ることにおいて、その何かの奥行きの深さ、不思議さ、分からなさを知ることである。つまりゲーテの場合も、奥村土牛氏の場合もいずれも、人間の生涯は常に未完であり、途上である、しかも「驚き」が起こり、美の奥深さに出会う今、ここがこの上なく大事なのである。「途上性」や「精進」というものと無関係に「今、ここ」を楽しむことは、いわゆる刹那主義に陥る。逆に「今、ここ」に真に生きることなく、ただ未来の為の準備教育や精進であれば、それは真に自分を生きることにならないのである。

以上において見た幾つかの例からも明らかなように、人間の生涯の、一見矛盾するように見える諸層(相)を一つに結びつけて見ることによって、単にそれらが両立するというだけでなく、矛盾に見えるものが一つに結びつくことによって人間の生涯成就の真実が見えてくるのである。人間の生涯の多様な全体像は、生涯教育あるいは生涯成就の豊かな可能性を示すが、それと共に「人間とは何か」ということへの真実な理解を深めるものである。

(六)

最後に、ここから開けてくる一つの展望について述べてみたい。

以上において生涯成就の為の教育としての「生涯教育」が真実なるものとして、豊かに広く実現される為に、人間の生涯の全体像をえがくことの必要性とその際考えるべき点を示そうとしたが、このような生涯成就を中心とする人間の生涯の全体像に取り組む立場として、「生涯人間学」とも言うべきものが考えられるのではないかと思うのである。

これは、別の所で試みた、人間独自の現象、例えば「驚き(不思議さを感じる心)」、「勇気」、「対話」等から「人間とは何か」を考える「哲学的人間学」と重なり合うところがあるが、しかし特に人間の生涯の全体像を考えることによって「人間とは何か」を問い、又人間が人間である為に人間の生涯はどのようなものとして考えられるべきかを問うという点で独自のものがある。

「生涯人間学」は、「発達心理学」や「生涯発達心理学」(守屋光雄氏)の成果を十分に受けとめなければならないであろう。しかしその上で、なおかつ人間存在の全体、及び多様な意味での「生涯成就」という観点を大事にするものである。

又、これは、「生涯教育学」や「人間形成原論」(森昭氏)と内容的に大いに重なるが、しか

し「生涯人間学」は、「教育」とか「人間形成」という観点から一旦離れることによって、「生涯教育」も「人間形成」も新しく自由に見直すことが出来るように思われる。

これ迄、教育学の学問的自立とか教職の専門性の確立ということが頻りに言われて来た。その為には対象としての教育がはっきりと限定される必要があるが、しかし生きた教育というのは、一つの塊のようなものとして輪郭づけることは出来ない。従って、教育を対象として限定しようとすればするほど、生きた教育を取り逃がすというジレンマに陥らざるをえないのである。「生涯教育学」や「教育人間学」、あるいは「人間形成原論」、更には最近注目されている「ホリスティック教育学」は、以上のような問題意識を持って、生きた教育に向かおうとする試みであると言ってよいであろう。

「生涯人間学」は、思いきって「教育学」とか「人間形成論」の立場から離れるのであるが、しかし人間の生涯あるいは「生涯成就」は、「教育」や「形成」を離れてはありえない。「生涯人間学」にとって「教育」や「形成」はやはり中心問題である。「教育学」や「人間形成論」から、人間や人間の生涯を見るのではなく、あくまで人間の生涯あるいは「生涯成就」という観点から、「教育学」や「人間形成論」が問題にしていることを見ていきたいのである。

「生涯成就」の一つの層(相)として「真に大人になる」、あるいは「人間が真に人間になる」ということを考えたが、これを突き詰めると、どうしても宗教や哲学で言われる「生死」の問題になるであろう。これからの時代は、一人ひとりが「生涯成就」をめざし、生涯教育に取り組むことになると思うが、その際誰にとっても「生死」の問題は、否応なく人生の主題とならざるをえない。

「生涯人間学」は、それを推し進め、その手助けをするものでなければならないが、その際、「生死」の問題に取り組み、その真実を求めようとする者同士の関係、つまり仏教で言われる「同行^{どうぎょう}(15)」の関係を最も大事な人間関係として強調するであろう。「同行」は、法を求め、悟達へと修行する同志、法友の助け合いの関係である。これは、全く自発的、主体的であり、又先達、後進の違いはあっても、本質的に求道者、修行者、「途上者」として対等である。又ある意味で最も深く一体感を感じ合い、勇気づけ合う同志愛の関係である。「同行」は、近代的ヒューマニズムが目指した自由、平等、友愛が矛盾、対立することなく、最も深く調和した関係である。このように「生涯成就」を目指し、「生死」の真実を求めて、互いに助け合う「同行」の関係こそ、教育的関係の本質と言えるものではないだろうか。そうだとすれば、「生涯人間学」によって、教育と言われるものの本質やその生きた全体も真に考えられるのではないかと思われるのである。

註

- (1) 森昭、『人間形成原論 遺稿』(黎明書房) 参照。
- (2) 相田みつを、『一生感動一生青春』(文化出版局) 8頁。
- (3) J. P. Eckermann, "Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens" (Die Tempel-Klassiker) S. 329. (Mittwoch, den 18. Februar 1829)

- (4) O. F. Bollnow, "Krise und neuer Anfang" (Quelle & Meyer. Heidelberg) S. 47.
- (5) Ibid., S. 45.
- (6) 森昭、上掲書、214頁。
- (7) 森昭、上掲書、202頁・208頁。
- (8) 『五井昌久全集』(白光出版) 13 詩集編、278頁。
- (9) 『論語』為政篇参照。
- (10) 和田重正、『おとなになる』(くだけ社) 参照。
- (11) 拙稿『「人生科」教育の可能性』(『教育人間学の根本問題』燈影舎、所収)、『「人生科」教育の立場—提唱者和田重正氏の人間観に学ぶ—』(『神戸女学院大学論集』第138号、所収) 参照。
- (12) 奥村土牛、『牛のあゆみ』(中公文庫) 170頁。
- (13) 日野原重明、『人生の四季に生きる』(岩波書店) 181・182頁。
- (14) O. F. Bollnow, Ibid., S. 34 ff. 参照。
- (15) 拙稿、『同行の姿勢で』(『同行と教育』くだけ社、所収) 参照。

(原稿受理 2001年12月14日)